

分裂文の総記的含意

加 藤 雅 啓*

(平成21年9月30日受付；平成21年11月10日受理)

要 旨

本稿は、英語分裂文の総記的含意を巡る議論を概観し、(i)否定分裂文における総記的含意、(ii)分裂文の焦点に生じる焦点下接詞、及び付加下接詞と総記的含意の却下可能性について、実際の談話から収集した分裂文を詳細に分析し、英語分裂文の総記的含意は、会話の含意であることを明示的に論証するものである。

KEY WORDS

分裂文 疑似分裂文 総記的含意 言語規約的含意
会話の含意

0. 英語分裂文における総記的含意

分裂文や指定的用法の疑似分裂文の焦点節は、次例が示すように焦点以外の要素を排除するような含意を伴うことが知られている。

- (1) a. It was John who broke the window.
b. John and nobody else broke the window. (Halliday, 1967:236)
- (2) a. What John saw was the play.
b. the play (and nothing else) is the exclusive goal of John's perception. (ibid.:224)

(1a)では、窓を壊したのはジョンだけであること、(2a)では、その演劇を見たのはジョンだけであることが含意されている。この含意は総記的含意 (exhaustiveness implicature) と呼ばれ、指定文の機能的特徴の一つであるとされている。

- (3) a. We want Watney's.
b. What we want is Watney's. (ibid.)

(3a)は当初ロンドンのビール醸造所のコマーシャルコピーとして登場したものである。しかし、このコピーは「(Watneyのビールだけでなく) 他のもも同様にほしい」と解釈できる。ところが、疑似分裂文を用いた(3b)は「Watneyのビールだけ、他は何もいらない」という総記的含意を持つため、(3a)のコピーは早々に疑似分裂文を用いた(3b)のものに差し替えられたと指摘されている (Halliday, 1967:224)。

英語分裂文の総記的含意については、これを言語規約的含意とする立場と会話の含意とする立場の二つの議論がある。本稿では、いずれの立場が言語事実を反映した妥当な分析であるか、実際の談話で用いられた例をあげて検証することにする。

1. 言語規約的含意と会話の含意

分裂文と疑似分裂文の総記的含意を巡って、これを言語規約的含意であるとする立場と会話の含意であるとする立場がある。ある表現の言語規約的含意は、いわばその意味の一部をなしていることから、この表現が用いられれば文脈を問わず必ず生じる含意である。例えばmanageという動詞を用いた文 John managed to finish his paper.では、必ず「何とか～する」という言語規約的含意を伴う。また、言語規約的含意は否定文 John did not manage to finish his paper.や疑問文 Did John manage to finish his paper?でも維持されることが知られている。したがって、前者の

立場では、分裂文と疑似分裂文の総記的含意は却下不可能であることになる。一方、後者の立場では、会話の含意は、定義上、却下可能であることから、分裂文、及び疑似分裂文の総記的含意は常に却下可能であると予測される。

太田(1980)は、意味論の観点から、比較的早い時期から分裂文、疑似分裂文の総記の意味に着目し、これを会話の含意による語用論的なものである、と次のように述べている。

分裂文、疑似分裂文の場合は、前提となる事物の集合と、断定となるその集合に属するメンバーの列挙とを文構造の上で明示することをその役目とするものであるから、余す所なく列挙するという含意がきわめて強く、ほとんどそれが断定に含まれているような感を与えるのであろうと思われる。それはSome people are happy.に含まれるSome people are not happyという会話の含意が一見論理的含意と思われるほど強いのと似ている。It was only John who protested.は上述の会話の含意を明示した分裂文であり、It was also John who protested. It was even John who protested.は会話の含意が文脈により否定されたケースであるといえる。

(太田,1980:601)

Halvorsen(1978)は、分裂文の総記的含意を言語規約的含意であると主張し、Horn(1981)は、これを一般化された会話の含意(generalized conversational implicature)であると主張し、Atlas and Levinson(1981)はこれに異を唱え、it分裂文の総記的含意は論理的含意であると主張している。Valluvu(1992:140)は、これらの議論を踏まえ、it分裂文の総記的含意は、論理的含意(entailment)、言語規約的含意、会話の含意のいずれの含意であるか意見の一致をいまだ見ていないと結論づけている。

分裂文の総記的含意に関するこれらの相反する立場について、分裂文の総記的含意を言語規約的含意とするHalvorsen(1978)とこれを会話の含意とするDeclerck(1988)の議論を見てみることにする。

(4) John managed to write a paper to present at the conference.

(5) John wrote a paper to present at the conference.

(6) It is difficult to write a paper to present at the conference.

(7) A: Smith doesn't seem to have a girl-friend these days.

B: He has been paying a lot of visits to New York lately.

(8) A: I don't think Smith likes big cities.

B: He has been paying a lot of visits to New York lately.

(Halvorsen,1978:12)

Halvorsen(1978)によれば、(4)の真理条件は、(5)の文の真理条件によって決まる。(4)の言語規約的含意である(6)は(4)の真理条件には関与しない。言語規約的含意は、用いられた表現の言語規約的な意味に依存しているので、ある言語表現がもたらす言語規約的含意は、その表現が用いられるときは必ずそれに伴って生じる。すなわち、(4)が用いられれば、必ず(6)の含意を伴う。このように言語規約的含意はコンテキストに依存せず、したがって、却下不可能であるといえる。一方、(7B)の会話の含意「スミスはニューヨークに恋人がいる」は、(8B)では生じない。これは、コンテキストが違うため、(7B)の会話の含意は(8B)では却下されるからである。このことから、会話の含意はコンテキストに依存するため却下可能であると言える。

(9) a. It was John that Mary kissed.

b. It wasn't John that Mary kissed.

c. It was John that Mary didn't kiss.

d. It wasn't John that Mary didn't kiss.

(10) a. Mary kissed John.

b. Mary didn't kiss John.

(11) a. Mary kissed somebody.

b. There is somebody that Mary didn't kiss.

(12) a. *It wasn't John that Mary kissed, (she didn't kiss anybody).

b. *I know that Mary didn't kiss anybody, but was it John that Mary kissed?

(ibid.:14)

(9a)と(10a)とは、同じ真理値を持つ、すなわち同じことを主張しているが、使われる文脈は同じではない。これ

は、it分裂文(9a)はその言語規約的含意として(11a)を持つからである。このことは、否定文でも、疑問文でも(11a)の言語規約的含意が維持されることからわかる。このような(9a)がもつ(11a)のような言語規約的含意をHalvorsen (1978) はexistential implicatureと呼んでいる。

The existential implicature is not the only implicature which is standardly present when a cleft construction is uttered. When a speaker utters a sentence like (59a), he also implicates something like the proposition expressed by (66).

(66) John was the only person that Mary kissed.

I call this type of implicature the *exhaustiveness implicature*.

(ibid.:15)

Halvorsenは、分裂文(9a)の発話に伴う引用文(66)のような含意を総記的含意と呼んでいる。Halvorsenはモンターギュ文法の枠組みによって総記的含意の定式化を試みているが、この試みは総記的含意を明らかにしようとする第一歩であると述べ (ibid.:16), 多くの困難な問題が残されていることを認めている (ibid.:95)。

Collins(1991) は、Halvorsen(1978) に従い、総記的含意は言語規約的含意であると主張している。

A semantic features of clefts and pseudo-clefts, which derives from their equative form (and which was introduced in Section 3.1.2 above) is that of exclusiveness....Following Halvorsen (1978), I shall regard the exclusiveness feature as 'conventional implicature'.

(Collins,1991:69)

これに対して、Declerck(1988) は、総記的含意は言語規約的含意であるか、それとも総記的含意であるのかということは、容易にいうことはできない、と次のように述べている。

It is not easy to say whether exhaustiveness is a conventional implicature or just a conversational one. As is well-known, conversational implicatures are cancellable, whereas conventional ones are not because they are part of the meaning of the expression. Now as far as the exhaustiveness implicature is concerned we note that the use of a specificational sentence in a context which cancels the implicature is sometimes acceptable, but sometimes not. That is, the implicature appears to be cancellable by some contexts but not by others.

(Declerck,1988:33)

Declerckは、総記的含意はある文脈では却下することができるが、別の文脈では却下できない場合があることを指摘している。

- (13) a. It was not only JOHN who kissed Mary. BILL and Fred did so too.
 b. It is mainly TOURISTS that come here.
 c. It was especially the CHILDREN that were afraid of her.
 d. It is primarily the WORKERS that are dissatisfied with the government.

(ibid.)

これらの例はいずれも適格文である。分裂文の焦点に用いられたnot only, mainly, especially, primarilyなどのparticularizerが、後続の名詞句によって指定される集合から、その下位集合を抜き出すことを意味しているため、総記的含意が却下されている。

- (14) It was John who closed the door.---No, he didn't. The door was closed all the time.

The only kind of cancelling that is relevant to the present discussion is that in which one and the same speaker first implicate something and then rejects it. This is not possible with presuppositions but is generally possible with conversational implicatures(cf. (67b)), where the implicature 'John is no longer a member of the club' is cancelled by and he still is).

(ibid.:35)

さらに、Declerckは、総記的含意が却下されるか否かを問題にするときは、同一の人物がある事柄を含意し、続けてそれを否定するような例で議論しなければならない、と指摘し、このような場合、前提は定義的に却下できないが、会話の含意は却下可能である、と述べている。

- (15) a. !It was John who locked the door, though the door was never opened.
 b. John used to be a member of the club, and he still is.
 (16) *It was Betty who came in last, although it was Mary too.

In fact, the only way in which the implicature can be cancelled appears to be by the use of *not only* or *chiefly*, *mainly*, *primarily*, etc. (as in (13b-d)). This suggests that the implicature, although it arises from conversational principles, must be conventionalized to a (fairly high) degree. (Declerck, 1988:35)

Declerckは、これらの議論から総記的含意は会話の含意から派生したものであるが、高度に言語規約的なものに変化したものであると考えられる、と結論づけている。

2. 否定分裂文

総記的含意に関する、これら相反する二つの立場のいずれが言語事象を正しくとらえているのか、実際の用例を検討してみることしよう。

- (17) As expected, Kenya swept the medals in the 3,000 steeplechase, but it wasn't three-time champion Moses Kiptanui who earned the gold. That went to Wilson Boit Kipketer, who won a sprint to the finish between the trio in 8:05.84. (The Daily Yomiuri, 8/8/97)

これは否定分裂文の例であるが、総記的含意を伴っているとは言い難い。分裂文は典型的な指定文であり、その基本的な意味機能はthat節で表される変項の値を焦点節の要素で指定することである。言い換えれば、総記的含意はこの変項を指定する総ての値の集合であるということが出来る。否定分裂文(17)は、変項部the X who earned the goldを指定する値はMoses Kiptanuiではないことを述べているだけである。すなわち、この例では総記的含意は却下されているといえる。

いま仮に総記的含意が言語規約的含意であるとする、焦点節の要素はthat節の変項を余すことなく指定する値の集合でなければならない。また、分裂文のthat節は変項を含む定名詞句であることから、焦点節には非特定の要素はなじまないことが予測される。

- (18) a. LONDON (Reuters)..."It (the age of the mother) shouldn't be a problem. It's other people that make it into a problem," Liz Buttle, who gave birth on Nov. 20 to a healthy baby boy, told Sky television in an interview broadcast Sunday. (The Daily Yomiuri (Reuters), 1/20/98)
 b. *What George saw was something.

しかし、(18a)の分裂文は全く問題のない文である。但しother peopleは不特定の人々を指しているためthat節の変項を唯一的に決定できない。したがって、この分裂文は総記的含意を伴うこともない。一方、(18b)では、予想通り疑似分裂文の焦点にsomethingのような意味的に空な不定名詞句は生じることができない。wh節の変項の値を指定できないからである。

3. 焦点下接詞only, justと分裂文

次に焦点節に生じる焦点下節詞(focusing subjunct)と呼ばれるonly, just, also, evenの共起関係を見てみると、分裂文、疑似分裂文の容認性に相違が見られることがわかる。

- (19) a. The monument marks the point at which the corners of the four states intersect. It is the only place in the United States where this happens. (National Geographic, Sep. 1996)

- b. This theory I find very appealing. It is more explicit than most theories on the market; ...it is the only theory that both properly acknowledges the linguistic underdetermination of what is said and yet accounts for the hearer's ability to select a unique interpretation. (*Behavioral and Brain Sciences* 10)
- (20) MacWorld Tokyo 1997, in fact, looked more like an auto show thanks to an eye-catching Olympus display luring in unsuspecting men with the promise of bikinis. What they found, however, was technology and innovation geared at the Mac. (*The Daily Yomiuri*, 2/25/97)
- a. What they found, however, was only / just technology and innovation geared at the Mac.
- b. ??What they found, however, was technology and innovation geared at the Mac, among other things.

分裂文が常に総記的含意を伴うとすると、*only*や*just*のようなある特定の要素を焦点化し、他を排除する語句を付加すると、冗長性が高まり、文の容認性が低下すると考えられる。¹⁾しかし、予想に反して(19a), (19b)の分裂文、(20a)の疑似分裂文は全く自然な文である。ただし、(20b)の*among other things*のようにいわば明示的に総記的含意と矛盾する語句が付加されると容認性は極端に悪くなる。また、(20a)の場合、*only*あるいは*just*は他を排除する焦点下節詞としてよりも、次の例のように、「単に」というような重要性の程度を表す意味に転化して用いられていると考えることもできる。

- (21) A : I lost my bag.
B : Did you lost your money?
A : No, it was only my lunch that I lost.

4. 付加下接詞*even*, *also*と分裂文

焦点下節詞の中でも*even*や*also*のような付加下節詞 (additive subjunct) が焦点節に用いられている例はほとんどなく、次の一例しか見つけることができなかった。

- (22) It was also/even John who protested. (Quirk et al., 1985:611)

しかし、(22)の容認性を調べてみると、*even*は用いることができないという判断が圧倒的に多かった。その理由は、一方で焦点要素として*John*を際立たせておきながら、他方で彼の行為が全く予期せぬことであることを述べることで、分裂文という構文の中では両立しないからである。*also*の場合は、「他の人に加えて」という意味を付加し、これは*John*を際立たせる分裂文の機能と矛盾しないため容認されるのである。

- (23) a. *It was even John that Mary kissed.
b. *It was even John who hit Bill.
c. *The one who insulted George was even John.

これらも(22)と同様の理由で容認されないと考えられる。

5. まとめ

本稿では分裂文、疑似分裂文の総記的含意をめぐるこれまでの議論を概観し、否定分裂文(17)、不定名詞句の例(18)、焦点下節詞の例(19)-(23)を挙げて論じた。このうち(18b)は変項の値を指定できないため、また、*even*の例(22)、(23)は焦点要素の意味と分裂文の機能が両立しない理由で容認できないことを指摘した。総記的含意が却下されないために容認できない例は(20b)のみで、これ以外の例は総記的含意が却下されていると考えられる。これらのことから、総記的含意は言語規約的含意であるという立場は支持することができないと結論できる。

¹⁾Declerck (1988:36) は、次の例を挙げて*only*は冗長的に用いられたのではないと論じている。

- (i) It was John that kissed Mary.
(ii) It was only John that kissed Mary.

(i)はWho kissed Mary?の答えとして、(ii)はWho else kissed Mary?の答えとしてそれぞれ異なるコンテキストで用いられると指摘している。

*本研究は、日本学術振興会平成21－23年度科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号No.21520503「談話における分裂文の総合的研究－関連性理論，機能文法，認知言語学による考察」の援助を受けて成された研究の一部である。本稿は、紙数制限のため、総記的含意に関わる議論について十分に述べられなかった加藤(2002)を元に、加筆したものである。

参考文献

- Atlas, J.D. and Levinson, S.C. (1981) “It-clefts, informativeness, and logical form: radical pragmatics (Revised Standard Version).” In P. Cole (ed.) (1981) *Radical Pragmatics*. New York: Academic Press. 1-61.
- Collins, P. C. (1991) *Clefts and Pseudo-Clefts Constructions in English*. London: Routledge.
- Declerck, R. (1988) *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-Clefts*. Leuven: Leuven University Press.
- Halliday, M.A.K (1967) “Notes on transitivity and theme in English,” *Journal of Linguistic* 3:177-274.
- Halvorsen, P.-K. (1978) *The syntax and semantics of cleft constructions*. *Texas Linguistic Forum*, II. Department of Linguistics, University of Texas, Austin.
- Horn, L. (1981) “A pragmatic approach to certain ambiguities.” *Linguistics & Philosophy* 4:321-358.
- 加藤雅啓 (1998) 「分裂文とwh分裂文の排他性含意」 *International Journal of Pragmatics* 8:33-48.
- 加藤雅啓 (2002) 「分裂文と疑似分裂文の総記的含意」『英語青年』2002年7月号，東京：研究社出版 236-237.
- 太田 朗 (1980) 『否定の意味 意味論序説』東京：大修館書店
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of The English Language*. London: Longman.
- Valluvu, E. (1992) *The Informational Component*. Outstanding dissertations in linguistics. New York: Garland Publishing, Inc.

Exhaustiveness Implicatures of Cleft Constructions

Masahiro KATO*

ABSTRACT

This article deals with the exhaustiveness implicatures of cleft constructions in discourse. The main points argued here are (i) that Halvorsen's (1978) claim that the exhaustiveness implicatures of clefts should be conventional implicatures cannot be tenable; (ii) that the exhaustiveness implicatures can be cancelable in some of negative cleft sentences and clefts with focusing subjuncts *only*, *just* ; and (iii) that the exhaustiveness implicatures appears to be conversational implicatures rather than conventional ones.

* Humanities and Social Studies Education